第五講　総合問題

次の文章を読んで、問一～五に答えなさい。

サルトルがいうように、己れの身体は、自ら牛耳ることのできない他の主観にとらえられるのであり、その理解と意味づけの点で、自身から逃げ去り他者に掌握される(a)ウき目にあう。すれ違う誰かが自分の体に視線を固定させただけで、私たちはファスナーや衿（えり）をチェックし、気の許せる相手に服装の適否をたずねたりする。身体は、他者の注意や評価の対象となりうる点において、私たちの意識を攪乱（かくらん）し不安にさせる。

〈装う〉者は、この測り知れぬ他者の視線に自らをさらす。この「可視性」の空間がどれほど自己を揺るがすとしても、人はそれと絶縁することはできない。自己が、まさしく他者との関わりの中で問いとして立てられ、追求されるものである以上、それは、「見る／見られる」といった可視性の関係空間から(b)ツムぎ出されるよりほかはない」のである。私たちは、逃れようのない「可視性」の空間の中で、自己の存在が他者に牛耳られないように、自らの身体の見え方とその印象を統御する試みへと乗り出さざるを

えない。

　キャミソールやピッタリしたパンツを身につけるとき、しばしば人はこの課題を背負い込む。自身の了解と意図にはおかまいなしに、自由に関心と意味づけを膨らませる他者の意識にとり囲まれること、それは、自身の存在が他者によって塗りかえられ、浸食されるような不安を生じさせる。そのとき〈装う〉者は、他者の注目を誘う媚びた雰囲気ではなく、性的な関心を払拭する快活さや、他者の視線をすりぬけるナルシシズムをかもしだそうとする。それは、得体の知れない視線を前にして、自らの身体に対する関心と意味づけを誘導・制御し、自身の存在を掌握しつづけようとする自己所有の試みなのである。

　(ア)〈装い〉は、他者の視線を前にした身体的存在の危険を、減殺または回避する防衛の戦略である。だが危険は、他者の視線の「暴力」だけに起因するわけではない。問題の核心は、自己と他者の意識の溝にある。近づいてくる知人が挨拶をするタイミングで、私が傍で動く影に目を落とすなら、知人は私に「他意」を嗅ぎとるだろう。身体のありようは、他者に対する私の関係態度を表わす〈身ぶり〉として読みとられる。この〈身ぶり〉を誤るとき、私たちは、他者からの敬遠や拒絶に出会うことになる。身につけるものも、身体のジェスチャーを構成する限り、このような危険と無

縁ではない。

　初めてのデートに、すり切れたジーンズとネックの伸びたTシャツでのぞむなら、相手の反発と嫌悪はまず避けがたい。〈装い〉は、他者への態度を表わす〈身ぶり〉として、他者の承認がえられるように、あるいは他者の反発を回避できるように、整えられねばならない。だがこの承認は、〈装い〉の美的な価値に関する評価を意味するわけではない。いかしたストリート・ファッションも、就職の面接の「勝負服」にするなら、承認をうるどころか、むしろ警戒の意識を喚起してしまうのである。

　私たちが、「異様な」、あるいはひどく崩れた服装の人を、とりあえず慎重に観察するのも、こうした警戒の意識による。つまり、ここで承認の成否を分かつのは、自らの〈装い〉が他者の判断に委(ゆだ)ねられることを自覚し、自己の安全と他者からの尊重を確保するために、他者との応答関係を引きうける構えの有無なのである。問題は、〈装い〉の具体的内実に対する肯定的評価ではなく、他者との応答関係を引きうけようとする関係態度の共約性にほかならない。毎日の身支度で私たちは、他者からの承認と社会的主体としての資格を維持する戦略をめぐらしている。この意味で〈装い〉は、他の主観との溝に落ち込む危険のある自己の存在を、他者に受容される身体へと転成する〈身なり〉なのである。

承認の戦略としての〈装い〉は、身体が自己に関する他者の認識と了解の対象になることから要請される〈身ぶり〉の一部であり、他者を前にした〈身のふり方〉である。それは、既定の所与としての肉体を被（おお）う外的な装飾ではなく、「社会的環境に私たち自身を提示するさいに身体をまとうやり方」であり、一つの「ボディー・テクニック」にほかならない。そしてまさに、この「身体をまとう」テクニックの要請によって、身体が装われるべきもの、成形されるべきものとされ、人為的な操作に服することになるのである。〈装い〉が身体であるだけでなく、身体そのものが〈装い〉でもあることが(c)メイキされねばならない。

この戦略は、必ずしも、リクルート・スーツのような画一性を追求するものではない。自分の太腿（ふともも）が流行の細身のパンツにあわないときに、縫い目を広げて横シワいっぱいで身につけるのは、他者の印象を意識できていないことの証（あかし）となってしまう。むしろ、あたかもモードに無関心であるかのように、体型にあったありふれた〈装い〉をそつなくこなすほうが、他者の評価と判断を意識した主体性をアピールできるともいえるのである。

承認の戦略としての〈装い〉の核心は、他者に対する自分の身体の見え方を反省的に自覚し、それを自ら意識的に統御する主体性をディスプレイ

する点にある。そこには、他の主観を前にして己れの存在を安定的に確保するために、他者に通用する〈身なり〉を自己統制しようとする自律的な自己の構えがある。だが、誤解してはならない。それは、〈装う〉行為に先行して存在する自律的な自己が、その内的な基準に合致するように〈装い〉を統制するということではない。そうではなく、〈装い〉をめぐる自律性の追求とは、他者の印象と評価を引きうけ、それらに呼応する社会的主体性を獲得することにほかならない。いいかえれば、〈装う〉者は、他者との応答関係を通じて、そしてその中でのみ、自身の存在を自らささえる自己となりうる。〈装う〉自己は、他者に呼応して〈装い〉を反省的に選択・形成する行為のそのつどの態勢として、行為の中でのみ生成し、示されるものなのである。〈装い〉は、たんに自らの身体的存在を統御しようとする「自己に関する所有」の戦略であるだけでなく、(イ)〈装う〉者が他者を前にして自己となり、自己として存立してゆくという意味で、「自己を所有する」戦略でもあるといえよう。

　ファッションを通じた自己所有の戦略は、成功を約束されていない。それは、他者との溝を前にした、主体の危ういサヴァイヴァルの企てであるほかない。しかも、現代の〈装い〉は、目まぐるしく財が変化・増殖し、

その動向が広く情報化されるシステムの中にある。こうした消費文化の中で、自己所有を追求する個々人は、一つの逆説に直面する。

　この逆説を理解するさいにもっとも重要なのは、ファッションを一つのコミュニケイションとしてとらえる視点である。すでに確認したように、〈装い〉は、私たちが社会的な承認をめざす戦略であり、体を保護し「隠す」営みであるだけでなく、コミュニケイションの企てなのである。確かにそこに、言語のような確定的な文法や広い共通了解の存在を見ることはできない。だが、少なくともそれは、「……ではない」という程度の相互理解を成立させる形象的な情報を伝達するかぎりで、一つのコミュニケイションなのである。

　このコミュニケイションは、現代の消費文化の中では、しばしばモードの形態をとる。ファッションを追求する者は、あたかも現在を生きていることの証を求めるかのように、ある基本的なスタイルや色づかいやアイテムを共有し、その変動のサイクルをともにする傾向をもつ。ファッションは、他者の〈装い〉を理解し、それに応答しうる自己を、社会的主体として認知させようとする、相互承認のコミュニケイションなのである。

　かりに、ファッションがこうした同調機制だけを特徴とするのなら、それは、自己やアイデンティティの存立に関わる現象とはならないだろう。

だがモードには、「限界的な差異化」を通じた独自性の提示という、もう一つの原理が内在している。「モードは、社会的な均等化を追求する傾向と、個性的な差異と変化を追求する傾向とを、一つの統一的な行為において重ねあわせる、多数の生の形式の中の特殊なものにほかならない」（G・ジンメル）。ローライズの流行を踏まえながら、色目やラインに差異を与え、どこにでもあるようなスタイルとの差別化を追求するふるまい。この「差異化」の次元に踏みいるとき、〈装う〉者は、自己の独自性と個性的なアイデンティティという課題を背負うことになる。

　このふるまいは、ひとまずは、差異を身にまとうことで、自己の独自な価値を認知させる企てだといってよい。だが、差異と独自性が眼目となることで、ファッションは形象的な美ないしは趣味の良さといった内容的な価値の選択から乖離してゆく傾向を抱えこむ。ローライズをエスカレートさせてヒップラインを台無しにし、ズボンを靴で踏みつぶすほど下げて裾に擦り切れをつくるとき、意外にも当人は、見栄えの悪さを自覚していることが少なくない。そこで(ウ)めざされているのは、他者と違う独自なオモシロサであり、しばしば他者もそれに対して「イケテル」という評価を与えるのである。

　こうした差異化の極北には、アンチファッションがある。それは、ラディ

カルに〈装い〉のコードを逸脱し、モードへの反抗をしかける。だがファッションの「戯れ」は、それさえもオモシロイ差異として、コミュニケイションの素材としてとりこみ、その活力の(d)カテとしてしまう。つまり、それが差異化の「戯れ」のさらなる展開を刺激する限りでは、「ファッション装置はそれ自身の否定を基礎として作用する」ともいえるのである。モードの活力の源は、スタイルの美的価値というよりも、互いに差異化を試みる自己増殖的なコミュニケイションにあるといってよい。ファッションの消費は、他者のふるまいとの噛(か)みあわせ、差異化のやりとりのオモシロサを追求するものであり、まさにコミュニケイションそれ自体の「楽しみ」を追求する「戯れ」なのである。

〈装う〉者は、この「戯れ」の中で一つの逆説を抱えこむ。差異のオモシロサを追求するふるまいは、差異化の参照項となる他者のふるまいに左右される。アイビーやサイケの貴重な「お宝」も、その都度の他者のふるまいと噛みあわないなら、コミュニケイションの「戯れ」が成り立たず、他者からの評価は期待できない。そしてまた、参照すべき他者たちのモードは、選択も統御もできない流動として、「戯れる」者に押し寄せてくる。(エ)ファッションの消費を「戯れる」者は、モードの流動と差異化の関係に翻弄(ほんろう)され、身体的存在を自身で統御する自己所有の関係を、自ら掘り崩し

空洞化させてゆくのである。

自己所有の挫折（ざせつ）は、個々人の〈装い〉の全体構成にも確認できる。人民帽、ジャージ、ウェスタン・ブーツ、サイバー・ジャケット……。これら総体を自らの〈身ぶり〉とする者の身体的存在は、差異化の「戯れ」が招き寄せる文化価値の数だけ分裂しており、アイデンティティと呼びうる統一性をもっていない。むしろそれは、差異化の「戯れ」が生み落とす、分裂的なパフォーマンスの寄せ集めにすぎない。ファッションを「戯れる」者は、真の自己とは認めがたいバラバラな「演技的」パフォーマンスを、他者とのコミュニケイションの要請におうじて引きうけてゆく。自己所有を追求すべき〈装い〉は、自己の存在を(e)ヒサンさせるパフォーマンスへと反転するのである。

（浅見克彦『〈装うこと〉の倫理―ファッション・消費・身体』より）

〔注〕○サルトル―フランスの哲学者（一九〇五～一九八〇）。

○キャミソール―肩紐（かたひも）でつるして肩を露出させた、女性向けの上半身用下着・上衣。

○G・ジンメル―ドイツの哲学者・社会学者（一八五八～一九一八）。

○ローライズ――股上（またがみ）を極端に浅くしたデザインのパンツ（ズボン）。

○アイビーやサイケ――いずれも一九六〇年代に流行したファッション・スタイルの一つ。

問一　傍線部(a)〜(e)を漢字に改めなさい。はっきりと、くずさないで書くこと。

問二　傍線部(ア)「〈装い〉は、他者の視線を前にした身体的存在の危険を、減殺または回避する防衛の戦略である」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問三　傍線部(イ)「〈装う〉者が他者を前にして自己となり、自己として存立してゆく」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四　傍線部(ウ)「めざされているのは、他者と違う独自なオモシロサであり」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問五　傍線部(エ)「ファッションの消費を「戯れる」者は、モードの流動と差異化の関係に翻弄され、身体的存在を自身で統御する自己所有の関係を、自ら掘り崩し空洞化させてゆく」とあるが、どういうことか。本文全体の論旨をふまえたうえで、一六〇字以内で説明しなさい。

（次ページより解答欄）

問一

(a)

(b)

(c)

(d)

(e)

問二

問三

問四

問五

第五講　総合問題　解答

問一

(a) 憂
(b) 紡
(c) 銘記
(d) 糧
(e) 飛散

問二

装いは身体に対する認識を誘導・制御するものであり、他者から一方的に不本意な意味づけをなされる不安を削減し、自己の存在を自らで掌握しようとする試みだということ。

問三

身体を装う者は、自分に対する他者の印象と評価を引き受け、その都度自身の存在を反省的に選択・形成する行為を通じて、自律的で社会的な主体性を獲得していくということ。

問四

ファッションにおいて、内容的な価値の選択から乖離し、個性的な差異と変化を追求して自己の独自性と個性的なアイデンティティを認知させることが企てられるということ。

問五

ファッションは、相互承認のコミュニケイションであると同時に、他者との差異化を通じて自己の独自性と個性的なアイデンティティを提示する営みであるが、差異化の参照項となる他者たちのモードは、選択も統御もできない流動的なものであるため、他者から認知される自己の独自性を追求すると、自律的で社会的な主体性を見失うということ。